Japanese Association for Religious Studies

リティ」概念は、一方では、ユダヤ=キリスト教的伝統の外部にある宗教的事象を示す記号として使われており、イロコイ族やアルゴンキン族の信仰から、経済学者ムハマド・ユヌスの生きざま（バングラデシュのムスリム家庭に生まれ貧困問題に取り組みノーベル平和賞を受賞）までをもカバーする幅広いものとなっている。他方では、キリスト教的な宗派の信仰も「スピリチュアリティ」という言葉で語り直されている面がある。したがって、この言葉には、倫理・宗教文化教育への賛成者と反対者の対立や葛藤が内包されている。

さまざまな「宗教」のあり方を提示する教科書は、各宗教について本質主義的な語りをしている部分もあるが、むしろ興味深いのは、宗教と世俗的な価値観の並列化を進めていることである。また、世俗的な社会生活のなかに埋め込まれている宗教的なルーツを発見するような叙述がなされていることもある。これらは現代社会のなかの宗教、あるいは身近な生活のなかで生徒が実際に出会う形の宗教のあり方に近い。このことは、学科の科目名が、「宗教」ではなく、「倫理・宗教文化」であることとも関係していると思われる。

間文化主義的な共生の試みが見られることも特徴的である。宗教と宗教、あるいは文化と文化のあいだの壁は、必ずしも乗り越え不可能なものとして提示されるのではなく、むしろ対話的な相互交流のなかで宗教や文化が変容していくことが考慮されている。

もっとも、これらのさまざまなポジティヴな要素がある一方で、問題点がないわけではない。たとえば、他者理解のあり方はやはりユダヤ=キリスト教的な読解格子が強いし、近代西洋的な「宗教」概念の相対化も十分とは言えないところがある。

宗教学における分類の問題と教育

藤原聖子

この四半世紀、近代的宗教概念と宗教学に対する批判が盛んに行われてきたが、その上でどう宗教を語りなおすかについては、個々の研究者の専門領域で試みられることはあっても、最も基礎的な宗教史や比較宗教論（宗教類型論）については未だ十分に議論がなされていない。すなわち、高等教育にせよ中等教育にせよ、教育という実践の場では誰でも避けることができない、各主要宗教の起源・成立・相互比較の語り方に、宗教概念批判・宗教学批判はどう関係してくるのかという問題が突きつめられていないのではないか。

そのような基礎的レベルから宗教を語りなおすには、まずこの問題固有の困難があることを認識する必要がある。というのも、それはポストコロニアル批評が明らかにした民族誌記述の問題、あるいはいわゆる歴史認識問題と重なる部分もあるが、それらに尽きるわけでもないからである。表象する先進国の研究者、その対象となる第三世界の人々の間の権力関係を克服するために、研究者はその特権的立場を離れ、現地の人々と対話の関係を築くべきだと言われるが、原始キリスト教・仏教の歴史については、一体誰が現地の人々にあたるのかは全く自明で

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

はない。宗教間対話の比喩は一層混乱を引き起こす。言い回しの修正（たとえば勝利主義史観的表現の削除）だけでは根本的な解決にはならない。

一つ確かなこととして言えるのは、困難は単に記述や事実認識をめぐるものではなく、これまでの宗教の分類方法に根があるということである。中でも世界宗教・民族宗教の分類は、宗教史の記述、特にユダヤ教―キリスト教関係史、部族宗教―イスラム関係史、ヒンドゥー教―仏教関係史の記述を大きく規定してきた。しかもそこには、日本特有の問題もある。近年の「世界宗教」の概念に対する歴史的な批判研究としては、増澤知子やジョナサン・スミスによるものが知られている。それらの研究からわかることの一つに、欧米では、かつては世界宗教をキリスト教、イスラム、仏教に限定していたが、後の研究者たちは「多元主義的エチケット」のために七に増やし、現在は「世界の諸宗教」という意味に変容したということである。これに対して、日本では世界宗教のカテゴリーは、現在も三宗教に限定して使われることが多く、その理由は『宗教学辞典』（小口・堀監修）の鈴木範久による説明から変わっていない。すなわち、M・ウェーバー以来の現世拒否的救済観の有無である。その原因として考えられるのは、一つには、「多元主義的エチケット」を求められるような日常的状況がないこと、もう一つは、西洋近代合理主義の特殊な発展（そしてそれと対をなす東洋の特殊性）を宗教文化という点から説明することへの需要が高いこと（そこに世俗的観点から宗教史を学ぶ意義を帰してきたこと）である。特に後者の関心の下では、（ウェーバー・テーゼに則り）カルヴィニズムに収斂していくようにユダヤ―キリスト教史を構成することになるため、否応なくプロテスタント中心的なキリスト教観になる。つまり、日本では、近代化論的関心が無自覚のうちにプロテスタント護教論、文化特殊性論を容認してきたという問題がある。特定の理論的観点からの構築物であったはずの類型が、各宗教に内在する本質であるかのように捉えられてきたのである。

それではこの問題について、宗教の基礎コースを教えなくてはならない者はどうすればよいだろうか。各宗教史の専門家が問題に取り組み、記述を修正するのを待つしかないのか。ここで提唱したいのは、逆に教育の場を積極的に活用することである。従来の学問論（科学論）では、研究者と研究対象の間の相互作用はよく議論されてきたが、多くの研究者はまた教室においても他者との相互作用を経験する。解釈学的循環はそこにも発生していることを意識的に研究に取り込むことについて、一つのテストケースを示す。

宗教教育の二方向
――水平的多元主義と垂直的多元主義のあいだ――

津城寛文

現代日本の宗教教育論は、何を目的とするかによって、大まかに四つに分けられる。政官主導の「道徳心」「公共心」の涵養を主張するもの、既成教団や法曹界主導の「オカルト」的な

NII-Electronic Library Service